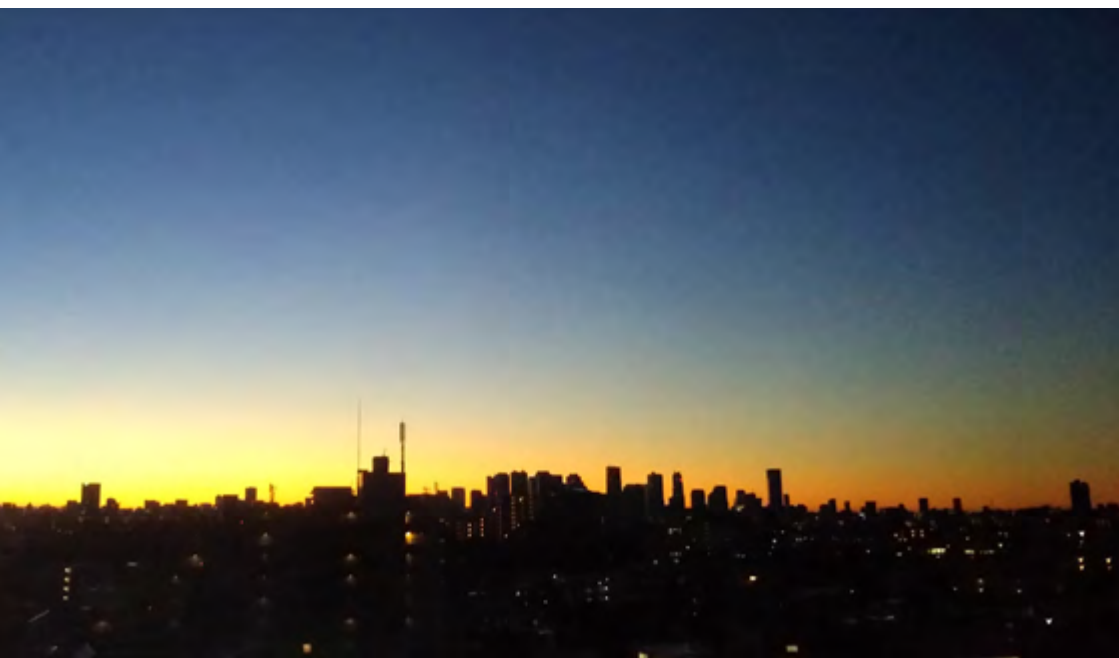


あを 1

2020



須賀忠男のBird Note



冬になると
やって来る
ジョウビタキ
日本では
一羽で行動する
渡り鳥だ

一月集

東京

佐藤 喜孝

かりがね

あらはなる鴈の列まっぴるま
まなじりのみゆるがごとし鴈の列
一灣をわたりきるまで鴈の棹

鴈の棹鋭角にして海わたる
鴈の列すこしゆるびて人の上
風あるか撓んでをりぬ鴈の棹
鴈の列空たひらかにひろびろと
遠ざかる翼なきかに鴈の棹
鴈の声なく消ゆるつらなりて
海へ一步寄りて見送る鴈の棹



東京 赤座典子

冬囲

ぬひぐるみ呼び名付けてる雪催
熊の子のことこ過る葛折
林檎園の堆肥をつけて帰宅せる
父と娘のしりとり速し冬萌ゆる
西東板に墨書の冬囲

埼玉 秋川泉

別れ

晩秋の雨のそぼ降る露天風呂
秋澄めり秋篠寺に技芸天
昼の月初茸ごはん炊き上がる
神無月別れまっすぐやって来る
ツーリング十一月の二十五度

埼玉 大日向幸江

雑詠

秋刀魚焼く薄き煙の懐かしき
丸顔の猫蹤いて来る小春かな
小春日の埴輪の顔の呆けをり
バスの窓手を振る人や冬椿
鈴生りの蜜柑を褒める知らぬ人

東京 七郎衛門吉保

十二月

秋澄むや狩行見下ろす摩天楼
看護師の声乾き気味十二月
「新世界」聴く窓の外雪催
霜月や帰宅電車の少し混み
鰯大根洋風となる銀座裏



東京

篠田 純子

炬燵

総理大臣賞の厚物に冬の蜂
初めての話のやうに聴く炬燵
オリンピックミュージアムの射撃体験冬ぬくし
うねうねと人抜く自転車歳詰まる
チンドン屋の聖者の行進年の暮

東京

篠田 大佳

ピエロ

秋深しルールの変はるおにごつこ
手を振れどきみは気づかぬしぐれかな
玉子酒恋に似てゐてこひでなし
冬来るきみはピエロになれなかつた
冬ぬくしそろそろ髭が伸びてくる

石川

定梶じよう

焼蓆

大根のさびしら泥が乾きくる
障子貼りかへて畢竟富むごとし
信号の赤の点滅日が短か
日あし惜しみをれば烏賊船冬灯る
平穏といふこと蓆が焼けてきて

東京

須賀 敏子

小春日

塩原の白き流れの落葉かな
時雨忌や黒羽城址に曾良思ふ
小春日や海上バスにて隅田川
小六月ローマ教皇長崎へ
冬暖か声のかわりし翔馬くん



東京 田中 藤穂

暮早し

木枯や面打つ家の灯のともる
公園のこわれたチャイム暮早し
菊祭路面電車はなくなりて
ギャラリーのぞろぞろ歩く冬日和
海沿ひに黄のまだつづく密柑山

三重 長崎 桂子

冬紅葉

暮の秋白き番は宙を切る
十月の気象変動国おそふ
台風禍防災訓練新採用
冬に入る道路の補修例の政策
今朝も行く土手の並木も冬紅葉

東京 森 なほ子

黄葉山

林檎剥く母と同じに左利き
秋澄むや客無きカフェの昼下がり
小さきカフェここにも在りぬ小六月
この雲は雪国の雲黄葉山
近々と越後湯沢の黄葉山

佐藤 恭子

梅つぼむ

ふたごころありと覚るる梅つぼむ
歩けあるけ五臓六腑が春になる
あやめからあやめに通ふ風ひそか
十歩から三歩をひくと八月来る
七十にして反抗期終戦日



大久保から東中野とつづれさせ

佐藤 喜孝

池袋西武屋上秋の雲

森 なほ子

柔き風に頬をさしだす芒原

赤座 典子

病む猫の背中をさすり秋の夜

秋川 泉

台所の窓一面に鰯雲

大日向幸江

野分去りのたりのたりの大西洋

七郎衛門吉保

脚立より軽ろき鋸の音秋の園

篠田 純子



まへぶれもなくばんしうがやつてきた

篠田 大佳

棚吊つてものが片づく雁の頃

定梶じょう

秋日和歩荷ゆつくり擦れ違ふ

須賀 敏子

もう要らぬものの多さよ鰯雲

田中 藤穂

秋草に脅ろかさるる刺を持ち

長崎 桂子

萩の花影のなかまで影のある

佐藤 恭子

喜孝 抄



十月号作品より

赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

蓄へし光を放つ夕薄

佐藤 喜孝

夕暮れ時、薄が黄金色に輝いています。それは、日のあるうちに浴びた光が、蓄えられたから、と作者は詠んでいます。この句は単に薄を、詠まれたのでしょうか。人間も、元気な時の力を失わず、輝き続けられたらと願われて、作者は詠まれたのではと、考えてしまいました。(典子)

嘶きて雲の峰飛び駿馬逝く

秋川 泉

作者は、多くの趣味を取り込み、人生を楽しんでいらつしやる。馬も競馬も大好き、もその一つ。伝説と言われている「ディープインパクト」を、詠んでおられます。確かに、サラブレッドが颯爽と走るレースは、一度夢中になつたら、抜けられないのかもしれないかもしれません。泉さんの元気の源の一つなのでしょう。(典子)

竜胆を活け心身の鎮もれり

篠田 純子

活け花で心身を鎮める、優雅な景色が浮かびます。「気持ちいを鎮めたい時には青色は適している」という説明を読んだことがあります。活けられた竜胆は、やはり、はつきりとした青色だったのでしょうか。清楚な白色を活けた後でも、すっきりとした心地になるのでは、とも思いました。(典子)

昼の月欠けてゐる方いとほしむ

定梶 じょう

薄く漉いた紙が、貼り付けられているような昼の月。その欠けている方を、いとおしく感じると作者は詠んでいます。欠けている方が、薄紙のように掠れて見えるならば、はかなさが伝わってきます。欠けてしまつて、見えない部分をいうならば、月をめぐる大きな景色、ということになるのでしょうか。「方」難しかったです。(典子)

敗戦日昭和の悲惨老にけり

長崎 桂子

八月十五日。ある程度の年代以上の方には、夫々、特別な思いが、浮かぶことでしょう。作者は、終戦日ではなく、敗戦日と詠まれています。その悲惨さへの思いが、薄らいでしまっている状況を、老にけりとされています。悲惨だった事実を忘れることなく、生きていかねばと痛感いたしました。

(典子)

水に出て直線に飛ぶ黒揚羽

佐藤 喜孝

愛用本には六十句ほど夏蝶の句が掲載されている。揚羽蝶の句は、華麗に右や左に、その自由奔放に飛ぶ姿を捉へた句が多い中で、作者は直線に飛ぶ蝶を捉えている。「浅葱まだら」蝶は、海上を飛んで移動することが確認されている。時に二千kmを超えるのである。正しく直線に飛んでいるのではなからうか。作者の見た黒揚羽は何処を目指していたのだろう。水上に出た蝶が見える。(吉保)

G パンの 藍 清 清 し 海 の 日 の

大日向幸江

定梶さんの俳句の尾鰭流にすると、ジーンズパンツになるのだろうか。こうするとジーパンのもつ、ある種の軽妙さが薄くなるようにも思える。若者ファッションの、トレンドからスタートしたジーパン。今は年齢性別にかかわらずなく、幅広く愛用されている。その色合いはブルーから藍色に代わり、日本的な表情が色濃くなってきた。正しく和製英語のジーパンらしくなっている。(吉保)

バス下りて皆歩き出す大花火

須賀 敏子

新潟県では七月の柏崎から始まって、長岡そして片貝と、全国的にも有名な、三大花火大会が催

される。大会は、会場ごとに特徴を持った花火が打ち上げられる。片貝では、新生児の誕生・入学や卒業・成人・厄年克服・喜寿や米寿・そして亡くなった方への追悼・など地元の人々の生活に密着した、紹介アナウンスの後に打ち上げられる。私にはこのローカル感がこたえられない。(吉保)

夜の地震盆提灯に目をやりぬ

田中 藤穂

東京が震度七の直下型地震に、ここ三十年以内に七十%の確率で遭遇する。と最近報道された。関連して、必要となる防災対策や避難対策などの、手段も提示されている。従来からの生活習慣や季節感を、大事にされている作者。とするとお盆提灯は、夜中じゅう灯がともされているのかもしれない。そして防災対策にも、気を留めておられている作者が、夜の地震に反応している。(吉保)

泣いてぬし子を黙らせて蟻の列

森 なほ子

私の子供時分の家は、隙間だらけで風通し良く、雨漏りもする木造住宅。蠅・毛虫・蛾・家守・蛞蝓・果ては蛇まで入り放題、住み放題。蟻もその仲間。当時の我が家の砂糖は、昔風の茶色の甕に入っていた。重い蓋が付いているにも関わらず、蟻はそれを嗅ぎつけ道を作る。朝、目を覚ますと、棚の上にある甕と床下が、一本の黒い蟻の蠢く線で繋がっていた。その驚きを思い出す。(吉保)

点滴の管カラフルや梅雨明ける

山莊 慶子

二月ほど前に白内障の手術をした。手術は簡単に終了した。その割に術後の目薬投与に、結構気を使っている。左右別々に、日に2回とか4回とか、そして4種類である。使用間違いを防止するためであろう、薬ケースも蓋も、その形状と色も違えている。作者は入院中なのだろうか、点滴管までカラフル化が進んでいるようだ。それらが安全と気分転換に、役立っているのだろう。(吉保)

台風裡家居の腕に時計して

赤座 典子

颱風の最中、腕時計をしてゐることに気が行つた。この句の時計のありやうの面白さは俳句以外では出せないと思つた。で、説明不要。The 俳句である。わたしは時計の面白さは然りながら「腕」に目が行つた。「腕時計して」ではなく「腕に時計」と時計ではなく「腕」に作者は目が行つてゐる。それにしても何気無く使つてゐる「腕時計」なる言葉を改めて見ると不思議である。英語では「wrist watch」とのこと。「腕時計」が可笑いとおもふのはわたしぐらいだが、「手首時計」では様にならないので仕方がないか。(喜孝)

ピーラーで剥きひらひらと新生姜

七郎衛門吉保

炊事のまねごとを始めてよりピーラーのお世話になつてゐる。ピーラーは包丁が使へぬ素人が使ふ物だと思つてゐたがさうでもなささうだ。妻から受け継いだピーラーは一度も研がないのにいまだによく切れる。この句、新生姜でどんなご馳走が出来るのか知らぬが、色や匂に包まれ明るく楽しさうな作品。オノマトペにもう一工夫あると句がより立つとおもふ。(喜孝)



電気炬燵

長崎桂子

私の幼かった頃の実家の暖房は、もっぱら豆炭か練炭を利用していたと記憶しております。年老いた現在の私は昼食をいただくとしても眠気が襲ってくるので、六、七年前まで昼寝をすることは一切なかったのですが、今はスイッチを入れればすぐ暖かくなる電気炬燵の恩恵に感謝して、三十分ほど休息します。

十一月号作品より

赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

人の居るところへゆく日赤とんぼ

佐藤 喜孝

赤とんぼは「梅雨時に羽化して山地で夏を過ごし、秋になると赤く染まって、平野部に帰ってくる」と愛用本の記載。作者は赤とんぼの生態を観察し、その行動をつかみ取って、一句にしたとすると、さすが！と驚嘆の一言。詩人三木露風も、赤とんぼと人との交わりを、内面的にとらえて、一遍の詩としたとある。それが不朽の童謡「赤とんぼ」となり、歌い続けられている。(吉保)

落蟬や生あればなほ強く鳴け

秋川 泉

狭いながらも我が家の庭でも、地中から大空への、蟬の通り道の穴を見ることが出来る。七年の眠りから覚めても、生命の謳歌はたったの一週間。自分の帰り道を探す如く、生れ出た穴の傍に蟬を見る。何故だかそれらはすべて、仰向けに横たわっている。命果てているのかと触れてみると、ジーと鳴き驚かされたりする。まだ生あれば、作者と同様のことを願わずにはいられない。(吉保)

築地市場跡にクレーン十基秋暑し

篠田 純子

昨年十二月十七日に、汐留シオサイトで吟行が催された。住まいが同じ銀座という地の利を生かし、作者は世話役として、豊富な題材を提供してくださった。出始めはカレッタ五十七階の展望場へ。お台場やレインボーブリッジを遠望し、片や眼下には浜離宮や、運河を挟んで隣接する築地市場跡を見る事ができた。解体が終了したのかクレーンは無く、広い！だけが記憶に残っている。(吉保)

石だたみ微かに轍良夜かな

定梶じょう

イタリアのローマに旅したことを思い出す。古代ローマ三千年の歴史遺物が、綺羅星の如く残っている。石だたみのローマ街道もその一つ。そこには幅二十cm深さ五cmほどの轍が、途切れることなく繋がっていた。そこには、古代ローマ繁栄の喧騒が見える。作者は、どこの石だたみに立っているのだろうか。昼間は見えなくても、良夜だけに見える、微かな轍がありそうに思える。(吉保)

曇天急雨やつと日差や法師蟬

長崎 桂子

油蟬に代表されるいわゆる蟬は、夏の季語の範疇となる。しかし法師蟬は秋の季語となる。正しく残暑のころを盛りとして姿を現す。しかしこの頃は、夕立や台風など、雨降りも多くなる。蟬は雨が降ると鳴かない。今年はとりわけ天候不順で、記録的な雨量の日本列島となった。そんな中で、

作者は、やっと出た日差しの中に鳴く、法師蟬に出会ったのであろう。(吉保)

手紙より飛び立ってゆく秋の蠅

篠田 大佳

私が俳句を始めて間もない二十五年二月、日本家園吟行の折に、作者とお会いした。私は七十台で俳句を始めた初心者。作者は多分二十代だったのでは。こなれた作句をされている様子から、どのような感性をお持ちなのだろうか、関心を持った覚えがある。俳句と年齢と感性、ここにある種の関連性の様なものはあるのだろうか。この一句も、その感性の発揮のようにも見える。(吉保)

長月や緋着る子の村芝居

大日向幸江

昔、桧枝岐という、福島県の奥まった村に行ったことがあります。落人伝説のあるその村には、小さな木造の舞台があり、年三回催される桧枝岐歌舞伎はとても有名です。伝統のある演目だけでなく、村人の子役が、緋の着物を短く着て、立派に演ずる姿が浮かびました。(典子)

針仕事夜長つくづく嬉しくて

須賀 敏子

敏子さんはいつも、和モダンという言葉がぴったりのユニークな装いをされています。ご自分で

和服をリメイクされているとのこと。秋の夜長に作業がはかどる嬉しさを、つくづくという形容で伝えています。以前、「これからは好きなものしか着ないことにする」と仰っていました。お会いするのが楽しみです。(典子)

秋暑し十年若返るとの化粧

田中 藤穂

近頃のテレビ、新聞などには、誰もが見た目を美しく変えられる、という広告が氾濫しています。年相応の容姿で良として生きている人は、まるで絶滅危惧種であると言わんばかりです。とついむきになってしまいましたが、そんな風潮を、作者はあっさりと詠んでおられます。達観しておられます。(典子)

少年に薄き口髭夏了る

森 なほ子

残念ながら私は、口髭の似合う日本人にも、初々しい口髭の少年にもお目にかかる機会はありませんでした。作者の身近にはそのような方がいらしたのでしょうか。少年の時の終わりと、夏の終わりとを併せて、なほ子さんらしい、静かな奥行きのある句に仕上がりました。(典子)

鶏頭の句には印象深い句が多い。鶏頭そのものの存在感ゆゑかも知れぬ。本当に鶏冠のやうな花の形と云ひ、太い茎の立ち姿は力感がある。なかでも「鶏頭の一本ぶつゝり折にけり 一茶」がわたしの好み。

この句は「整列す」と僅かだが擬人化してゐる。さうさせる力を鶏頭花が有してゐる。消えてゆくものと生命力溢るる植物との出合ひである。(喜孝)

房州やブルーシートの上の月

七郎衛門吉保

「上の月」の「上」は必要ないとも云へるがここでは効いてゐる。温暖化、異常気象などと云はれた昨年の颱風にはわたしも驚かされた。家の中にゐてはじめて恐いと思った。被害に何度も遇はれた人もをられた。この寒空、あのビニールシートの光景は如何な様子なのだらうか。

被害は房州に限らぬが、この地名は被害地を代表してのこと。しっかりと作品のなかで力を出してゐる地名である。(喜孝)



定梶じょう

長崎 桂子

人伝に病とのこと友の冬

「人伝に」。文法上正しい遣い方なのですが、俳句的にはこの「に」を外したい。「やまい」の措辞も文語的に「病臥」と。〈聞伝へ病臥とのこと友の冬〉。「友の冬」の「友」。俳句ではこの言葉の使用、句が緩む、と言つて嫌う傾向があります。でも、「病臥とのこと」「ともの冬」「と」の音が上手に響きあつていて、気にならない。時と場合による、ということでしょう。

小春日をあれこれこなす一日かな

うららかな初冬の一日、することがいっぱいある。思いを素直にのべていい句なのですが、めりはりが欲しい。へしなければならぬあれこれ小春かな。

山茶花の今を盛りに人気なし

椿に比べこの花は、どちらかと言えばつづまやか。それが「ひとけなし」の措辞に働きかけているわけでしょう。しかし、効いていると思えない。目先を変えへ山茶花の今を盛りに散りしけるへ。

七郎衛門保

したしたと乳白色の冬日かな

冬日を形容するに「したした」「乳白色」。うまい。「乳白色」はそもそも、絵具の発色を穏やかにする、と聞いたことがありますし、「したした」は足音の忍びやかなことをいう、と辞書にあります。まさに冬日。

リフト無きゲレンデ寂し大枯野

「寂し」のことば。当りまえの処で遣えば当りまえの句になってしまいますね。へリフト無きゲレンデにして大枯野へ。まだ雪に遠い頃なのですね。

夷隅安房シート外れぬ冬来たり

「いすみあわ」は、房総半島の地名。昨年の水害風害に遭はれた所。被害にあつた屋根に張られたシート。色が青いのでブルーシートともいわれます。寒い冬になっても修復が叶わずまだシートの

ままで年を越したのでしょうか

大日向幸江

「はしたて集」はスタート時五句投句でしたが現在三句投句。幸江さんの投句用紙五句ですので、以前の用紙を持つてらしたのですね。折角の投句です、五句を頂きます。

あっけなく冬の紅葉の果てにけり

冬紅葉があっけなく散つちやつた、と仰有るのは当然に過ぎます。こんな時は句切れを作つてやれば変つてくると思います。へあっけなし冬の紅葉の果つることへ。

風呂上がり病追いやる温め酒

この句も当りまえの方に付きますね。「病追いやる」がその素地。また「風呂上がり」が名詞か動詞かあいまい。へ湯上がりの酒温め扱つつまみものへ。

霜月の商店街の閑散と

散文の語序ですね。へ閑散たり商店街の霜月はへ。

小春かなあのそのあれで終りたり
ご夫婦の会話なんでしょうか。二句切れも時に面白いのですが、出来たら避けるのが原則。へ小
六月あのそのあれで終りけり。

燃え上がる焚火に焼べる日記帳

だからどうなった、という説明のないのが好感もてるのですが、「燃え上がる」「焼べる」などが
説明に近いことば。へ日記帳焚火に焼べて燃えたがらず。

森 なほ子

秋風の届かぬ地中電車待つ

坐五「電車待つ」とありますので「地中」の意味も理解できるわけですが、やっぱり無理筋。へ秋
風の及ばざる地下電車待つ。地上の秋風に思いを馳せてらっしゃる。

暮の秋雨よ風よといふうちに

この「雨よ風よ」を単純に台風と理解しては安易にすぎるでしょうが、本年はことに「雨よ風よ」
の措辞が身に沁みる。且つこの句、将来にも残り得る。

二十一発の礼砲爽やかに

俳句の簡潔さつづまやかさ。

須賀 敏子

武蔵野のはけの庭園落葉踏む

「はけ」は関東語ですね。地名にもあった筈。そんな処に庭を持つてらっしゃる。坐五は「落葉かな」
とする方が。

微かなるピアノの音色小春かな

上五中七が響きあっている、あるいは付きすぎている、など読み手の意見を異にする可能性があ
りますが、因果則を言っていない。好感が持てます。

土曜日の二時間ほどで柚子のジャム

「ほどで」の措辞がこの句を口語、即ち川柳風にしてみました。一存で筆をいれます。へ日曜の二
時間かけて柚子のジャム。へ「日曜」の「に」と「二時間」の「に」の音の重なりを活かしたのですが。

秋川 泉

ゆるゆると亀の散歩や杜鵑草

「散歩」の措辞で擬人の句になった。へゆるゆると亀の歩める杜鵑草。杜鵑草と亀の居場所に齟齬あるような気もしますが、この草は植えられることもあるそうですね。ならば泉水のある庭園を想定してもいいわけ。

あかね雲庭いっぱいの秋桜

「庭いっぱいの秋桜」。下句にこれを据えること平凡な叙景句にしてしまう。へコスモスが庭にいっぱいあかね雲。夕景にしろ朝日に映えるにしろ結句に据えて初めて中心ができる。あかね雲。

山城や冬満月のさえ渡り

「山城や」と措いたところが勝れて上手なのですが、季重なりが宜しくない、と。へ山城や冬の満月澄みわたり。

赤座 典子

寄せ植や背丈競へる篝火草

中七坐五で一本やりに表現してますね。へ寄せ植や背丈を競ひ篝火草。「寄せ植えや」で切ってますので、一本槍で表現しても宜しいとも言えますが、やっぱり。

おすすめは今川焼は十勝館

「おすすめ」は典型的な話し言葉なんです。川柳ならよろしいのですが、俳句ではできるだけ書き言葉を遣いたい。できなかつたら思いつて外してしまう勇氣も。へ十勝館今川焼を熱がるよ。

紛ふほど山茶花色の返り花

桜と限らないのが「返り花」なんです、何の花なのでしょう。か。「まがふほど」と強調してますので気になるところですが、山茶花のうすい紅色に紛うのはやはり桜なのでしょう。

堀炬燵

秋川 泉

山寺の冬はしんと寒く暖を取るの大きな堀炬燵であった。住職の父は、漢方の卵の油や梅肉エキスを作ることには長けていた。若い父は料理と云うものはしなかった。母が風邪で寝込むと我が家の食事は餅のみになった。大きな堀炬燵の上を外し、炭火に網を掛け堀炬燵の周りに幼児三人と父が腰掛け餅を焼く。何もつけずただ焼いただけの餅を寝込んでる母にも運んだ。白く焼かれた餅はもちだけの味が甘かった。この時の父はこれが精いっぱいだったのだ。その時は悲しかったはずだが、今では何とも云えず滑稽で、テレビのドラマを見ているように思い出されるのである。



愁ひつつ

定梶じょう

松尾芭蕉に

衰ひや歯に食ひあてし海苔の砂

がありますね。板海苔に砂の混じっていること今はまずありませんが、養殖ものは内湾の砂地の水中、岩ノリは「外海の岩礁上に生えるものを採った。ですから以前は、海苔に砂のあることほぼ常識でした。「歯に食ひあて」てしまった時のあじきなさは、どんなにも心当たりのある経験。芭蕉はそれを身の衰えととった。

与謝蕪村には

牡丹切て気のおとろひし夕べかな



があつて、やっぱり「おとろひ」と表現。

そして江戸期も末に近い小林一茶は

おとろへや楯折りかねるひざがしら

と使っている。

「おとろへ」の「へ」を「ひ」と書くのは当時の慣用的誤用である、と芭蕉蕪村は現代人から一言付されています。ですが、一茶が正しくって他のふたりが誤ったわけではない。例えば

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら 蕪村

の「愁ふ」は、今では「愁ひ」が正しいのか「愁へ」が正しいのか分からなくなっている、とするのが本當の処でしょう。

ことばは変わる、のですね。

元日や関東衆の国言葉

許六

佐藤喜孝

「鶏が鳴く」といふ枕詞がある。

鶏が鳴く東壮士の妻別れ

悲しくありけむ年の緒長み

万葉集四三三三番の太伴家持の歌。鶏が鳴くは「東」にかかる枕詞。京の人が聞くと東国の人言葉はなにを言っているのかわからない。まるで鳥が鳴いてるやうだといふ意と聞いたが、すこし調べたが確認が取れなかった。万葉仮名では「等里」と書かれてゐる。何故鳥でなく鶏なのだらう。「鳥」の囀の方が相応しく思ふ素人である。

NHKの「チコちゃんに叱られる！」で教科のひとと「国語」をなぜ「日本語」と言はぬのかといふ

放送回があった。明治政府が西と東では言葉が通じず齟齬をきたした。そこで標準語を定めることに。京言葉だ、いや江戸だとケンケンガクガク十数年を要したとか。京言葉を押す人が少なくなるのにかかった年数とか。日本語の多様さは万葉の世から変りなかったやうだ。

旧正月になるとアジア諸国の旅行者が増えさまざまな言葉が町に溢れる。エレベーターで一緒になってもおしゃべりが止まらない。どこの国らしいとおぼろげにわかるが内容はまったく判らない。まさにチンプンカンプン。

掲句なぜ「元日」やなか首をかしげてゐるところ。

脇ざしを横に廻して雑煮かな

許六

十団子軒に許六が駕と槍

「俳諧鱗」

中川句寿夫さんをしのんで 六

風鈴や吊り替ふ東京物語
 かりがねやずしりと二十四万語
 鶯が鳴く縹激として数へ年
 朴の芽がほぐるる童話読むやうに
 ただよへるもの白壁の今年竹
 父看取る更に遠くの夕蛙
 竹林に入りて万の目しじみ蝶
 秋燕動かぬ山を縦横に
 新涼の群を離れて真鯉かな
 雪解川自足の母に音立てて



句寿夫さんは、とま
 かく俳句感のいい人
 だった。
風鈴を吊り替ふ東京物語
 『雲母』参加当時の
 作品だが、「東京物語」
 が何であるかを知らな
 いで取り入れて、そし
 て成功した作品だ。俳
 句感。あるいは
かりがねやずしりと二十四万語
 辞書出版の世界で
 鎬を削る「辞苑」「辞
 泉」「辞林」の三書の
 うち広辞苑が、初めて
 二十四万語の収録に到達
 した。そんな新版が刊
 行されたことを話した
 ら掲句になった。これ
 も感。何によらずそう
 なのだが、文芸でもこ
 の感の善し悪しに左右
 されることみんな知っ
 ていて、拐て。

抄 定梶じょう

あをキーワード俳句辞典（はな―はな）

話
 田中 藤穂
 堀内 一郎
 須賀 敏子
 長崎 桂子
 鈴木多枝子

鴟と猫なにかお話五月の窓
 手毬唄昭和の話はづませて
 耳遠き大工と話す枇杷の花
 縫ひぐるみの兎と話し春近し
 早ばやと忘年会の話かな
 たれかれに話しかけたき寒暮かな
 木の上の人と話して暮れ早し
 立話ほたるぶくろに聞かれぬる
 さくらんぼ世間話の自づから
 浅草へ行く話その気に春來たる
 何もかも話せた頃のさくら草
 鴨と聞くガイドの話間延びして
 黒揚羽定刻に來し話すかな
 良い話拡げる友や梅日和
 年の暮無性に話したき日なり
 柔い枝内緒話の赤とんぼ
 寄合や温い話を話合ふ
 老集ひ自立の話ごまめ囁む
 下校の児ひそひそ話す曼珠沙華
 しぐるるや句引かされし子の話
 途切れなく娘と話すラベンダー
 留守電に話す空しさ外は雪

篠田 純子
 芝 尚子
 赤座 典子
 早崎 泰江
 森山のりこ
 佐藤 恭子
 藤野 寿子
 鎌倉喜久恵
 山莊 慶子
 斉藤 裕子

じつくりと話し合ひをり春の鶯
 大櫓と昔を話す東風の昼
 熱中症六名といふ立ち話
 幾そ度同じ話をねぢり花
 同じ話おんなじ笑顔日向ぼこ
 大きくさめして話のもとに戻りけり
 佳き話聞く紅梅の日溜に
 何といふことなき話春炬燵
 落葉掃き猫と話の出来る人
 菖蒲の湯母に初めて聞く話
 隣席の話筒抜け夏館
 草餅やまづは四方山話から
 雪搔の手を止め雪の話から
 新蕎麦やゆつくり話す人になり
 戦争の話は尽きぬ雲の峰
 遺伝子の話長々梅雨の月
 夢の様な話が弾む万愚節
 天を衝くあまつ水から裏話
 咄家の話半ばに羽織ぬぐ
 戦争中はと話し出す炎天下
 戦争中とはと話し出す炎天下
 看護士のひそひそ話五月雨
 秋高し朗らに話す癌患者



あとがき

このあとがき旧の元日に書いてます。昨年に続き
須賀忠男さんに「須賀忠男のbird note」として野

鳥で飾って戴きます。お楽しみに。ながらく「はしたて集」を定梶じょうさんにお手伝いして戴きました。感謝。いつまでも甘えてをられぬと改心しました。定梶じょうさんには作品集から書きたい句を撰んで書いていただくようお願いしました。これも楽しみ。〇〇号作品より」はわたしの愛読するところ。毎号楽しみ。作者も気づかぬところに光を当て、読み応へのあるお二人の文章です。

(喜孝)

ご芳志多謝

田中 藤穂 様

二〇二十年一月号

発行日

一月二十五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇円 (送料共)／一年

ゆうちょ銀行 (普)

(店番018) 4586402

佐藤 喜孝 (サトウ ヨシタカ)